詩とことば

阿部公彦

＊5月

ときに無意識の世界にも

大江健三郎と古井由吉。現代日本を代表する作家の対談が一冊にまとまった（『文学の淵を渡る』（新潮社））。小説を本業とする二人だが、詩の話題が多いのがおもしろい。共に外国詩との格闘が文体意識の根にあり、それだけに読むことの根本的な困難にも敏感だ。外国詩を読むとは「ある瞬間だけに成立する運動行為」だという古井。対して大江が、詩を読む行為は「現在」がすべてだが、その「現在」がすぐに消え、その向こうに「歴史」と「永遠」が浮かぶと展開するあたりとても刺激的である。短篇を書く際、まず音律が聞こえるとの古井の述懐は、表層的な明晰さを疑い、呪術的なものにも感受性を発揮してきた作家ならではだろう。

四元康祐の『詩人たちよ！』（思潮社）も詩の批評。実作では実験的なスタイルで知られるが、本書では哲学者の井筒俊彦の考えに拠りつつ言葉の深層をさぐる。堂々の直球勝負だ。詩人は「言葉の意味分節作用の及ばない世界」に挑むとのこと。ときに無意識の世界にも足を踏み入れる。個にこだわりつつ、大きなものにも呑みこまれる。

宮田毬栄『忘れられた詩人の伝記』（中央公論新社）は、まさに大きなものに翻弄された詩人の伝記。大木惇夫はかつての人気詩人だが、戦争協力の烙印をおされ人々の記憶から抹消された。盛期の交友関係は実に豪華。作品はときに感傷的だが、悪いものではない。と同時に、大きな時代の力を感じる。文学史の裏面がのぞける本だ。

詩集では高階杞一『水の町』（澪標）がいい。こんなふうに詩が生まれるのかという関節の柔らかさでひょいひょいと展開。入り口は甘くも見えるが、必ずシャープに締まる。たとえば「雨になる」。雨が降る中、「胸や／手や／足の各地で／雨になる」が、「そばにいる／犬の頭をなでていると／犬も濡れていく」というまとめ方が見事。

訃報の届いた長田弘の作風があらためて偲ばれる。刊行されたばかりの『長田弘全詩集』（みすず書房）をめくると、選ばれる言葉は穏やかで物静かでも、どこかに禁欲性をひめ、目に見えない緊張感がみなぎっている。日常世界に降り立っても、すくっと立つ作品ばかりだ。いつまでもそこにいて欲しい詩人だった。（東大准教授）

庫化

こ女性とのささやか
「マリアはいます
正な言葉でつづられ
で戦中・戦後の時代
売けてきた女性の確
惑じさせる。編集者
を紹介されたという
「言葉の切り口と使
違えていない。こう
が自分の本を手にと
もしれないと思う
りともおろそかにで
う気持ちになる」と

んは「こんな形で出
の強い本だと思いま
。知られざる良書を
るという、文庫本の
じた。
文化部　川村律文）